

# 東光原

熊本大学附属図書館報

*Kumamoto University Library Bulletin, No.32, Apr. 2002*

- 熊本に 本がなければ ただの熊
- 八雲の三男 小泉 清のこと
- 田中千束さんのこと  
— 紺綬褒章・人となり・近況 —
- 入退館システムを導入



小泉 清 「裸婦」(恒文社刊行『小泉清画集』より)



## 熊本に 本がなければ ただの熊 ※1

高 塩 勝 也

### 図書館って なぁに

広辞苑によれば、「図書館＝図書・記録その他の資料を集め保管し公衆に閲覧させる施設」とある。子供の頃だが、新設の中学校に進学したおかげで図書室には、本当にインクの匂いがするような本がたくさん並んでおり感動した記憶がある。無料で読め、貸出しもでき、まさに手当たり次第に読んだものである。百科事典（もちろん子供百科）を何を調べるでもなく五十音順に読んだ記憶もある。さて、図書室に入り浸る傾向は、そのまま高校まで続いたが、大学進学時に頓挫した。というのも大学図書館の蔵書数には圧倒されたが、当時の感覚では、古い本が多く、新刊が見当たらないと言う不満からである。いま、大学図書館勤めをするようになって考えれば、100年の歴史があり100万冊の蔵書があるとなれば、今年購入した本は100冊に1冊しかないということになり、なかなか新刊が見当たらないと言うことが分かった。本の古さを嘆くより歴史の重みに感動すべきであったと悔やまれるこのごろである。

※2

### 学問って なぁに

むかし、若い職員を相手に「学問の目的は、その学問の存在価値をなくすことである。」と煙にまいたことがある。たとえば、物理学において、数多くの研究の結果、物理学上のすべての疑問がなくなれば物理学をそれ以上、研究する必要はない。学習方法、実験方法、教育方法、教授方法等の問題は残るかもしれないが、物理学自体を追求する必要はないというのが、その論拠である。実際は、新理論の構築が、新たな謎、疑問を呼び永遠に完結しない問題ではあるが。さて、これを電子図書館の問題に適用するとどうなるのであろうか。電子図書館化の推進は図書館自体の存在価値をなくすことにはならないか？となる。事実、多くの研究者は、研究室等のパソコンを駆使して必要な情報を入手しており、情報の現物が欲しいときにのみ図書館を利用している現状にある。熊本大学や他の大学、研究機関のデータベースの構築が完成すればますますその傾向は高まるもの

と思える。電子図書館化の推進は、図書館の利用離れを促進することになりはしないかと危惧している。  
※3

### 図書館って なぁに

そうなったとき、私は一人、にんまりと微笑むのである。みんなが、自宅のパソコンから世界中に学術情報を求めているときに、一人図書館にいて、ゆったりとした読書を楽しむのである。むかし学生時代に果たせなかった「大学図書館の本を読むという夢」を満喫するのである。さて、新入生諸君、大学図書館の膨大な蔵書に圧倒されるかもしれない。また、歴史を感じさせる古い本も混在しているかもしれない。しかし現館長のもと、新刊本の収集に励んでいる熊本大学図書館である。年寄の私と読書を楽しんでみませんか。あなたの近くで、腹の出たおっさんが本を静かに読んでいたとしたら、それが私です。

(たかしお かつや 附属図書館事務部長)

---

※1 熊本大学からS大学に転出した人の口癖「国立99大学のうち、本のつく唯一の大学である。」のパクリである。

※2 配架を工夫することにより、比較的新刊の本をまとめることは可能であろう。熊本大学の配架は、比較的用户者の立場でのものと思えるが、経験したいくつかの大学の一部では、図書館人の都合での配架と感じられた例がある。配架を含めたサービスについて提供する図書館から、利用してもらう図書館への脱皮が必要である。

※3 物理学の問題と同じで、完結することのない電子図書館化である。また、図書館における今後の重要な課題は、ネット上にある「ごみ」の処理である。ネット上に提供される膨大な情報のほとんどは価値のない情報であり、その中から必要な情報のみを選別する手段が重要になる。



## 八雲の三男 小泉 清のこと

金 原 理

五高で教鞭を執ったこともある小泉八雲—八雲は1891年(明治24)11月から3年間、五高で、英語とラテン語を教えた—は我々日本人にとって馴染み深い作家だが、彼の三男小泉 清が優れた画家であったことは意外に知られていない。彼は1962年(昭和37年)2月21日、62歳でみづから命を絶ったが、その死を悼んで「芸術新潮」(1962年4月)、「三彩」(1973年2月)など、一流の美術誌に追悼の文章が寄せられたり特集号が組まれたりしているし、またこの同じ年に刊行された『小泉清画集』(1973年2月、救龍堂)には、里見勝蔵らの画家以外に、武者小路実篤、石川淳など、その当時の著名な作家が彼を回想する文章を載せている。この一事をもってしても、彼が一時期を画した画家であったことを窺うことができるだろう。清は1919年(大正8)に東京美術学校(現在の東京芸術大学)に入学、同期生に岡鹿之助、1年上級に佐伯祐三、5年上に里見勝蔵がいた。彼はこの里見に兄事し、絵の手解きを受けている。里見は数少ないヴラマンク(1876~1958)—熊本県立美術館にはヴラマンクのすぐれた風景画が所蔵されている—の弟子で、彼には師匠直流のフオーヴィスム(野獣派)的な原色を荒々しく駆使した奔放な作品が多い。清は病を得て1921年(大正10年)に美術学校を退学しているが、そうしたこともあって画家としてのデビューは遅く、読売新聞社主催の第1回「新興日本美術展」が1946年(昭和21)に開かれたが、これに里見に勧められて作品を出品したのが最初であった。出品作品は「向日葵」他3点であったが、読売賞を受賞、デビューを飾った。その実力を梅原龍三郎に認められて、1954年(昭和29年)に国画創作協会の会員に推挙されている。その一年前には第2回「日本国際美術展」(毎日新聞主催)に出品しており、その後は大阪や東京で個展を開いて、精力的に活動を続けた。彼が里見勝蔵に師事したことは前に述べた。初期の作品には師匠譲りの原色を自在に操った奔放な絵も見られるが、じきに清独自のスタイルを獲得するに至る。それは厚塗りによって画面



小泉 清 「岩と海」(恒文社刊行『小泉清画集』より)

に重厚感を与え、裸婦の肌もまるで岩肌のようなマチエール(質感)に仕上げていることである。そして物と物との境目を大切に、作品によってはその境界線をあざやかなヴァーミリオン(朱)で縁取りを施しているが、それが極めて効果的で絵の魅力を引き立たせている。対象は自由にデフォルメされ、一見荒々しいタッチで画面に筆を叩き付けるように表現されているが、静謐な美しさが伝わって来る。清には八雲の血が流れていながら絵は非ヨーロッパ的で、むしろ日本の土の香りが強く感じられる、そんな作風なのである。彼の画家としてのデビューは46歳でけっして早くはないし、また働き盛りの62歳で自ら命を絶っているが寡作ではない。1989年(平成元年)に恒文社から刊行された『小泉清画集』には237点が収集されている。清の画集はこの18年に凝縮されたのだった。

<付記>年譜の部分に関しては、『小泉清画集』(恒文社 1989年刊)を参考にした。

(きんばら ただし 文学部教授)



# 田中千束さんのこと — 紺綬褒章・人となり・近況 —

森松睦雄

多数の図書を永年にわたって寄贈していただいた田中千束氏に学長から感謝状が贈られたことについては、以前 (Vol.26 No.3/4) お知らせしましたが、このたび小泉純一郎内閣総理大臣から紺綬褒章が贈られ、その伝達式を平成13年11月ご夫妻をお招きして、学長室で行いました。ご来学のまえに検査入院をされたとのことでしたが、幸い異常なく、湯河原から遠く熊本まで来ていただきました。伝達式の後、図書館、五高記念館を訪ねられ、またポート部での思出の江津湖ではご夫妻で写真を撮っておられました。大変お元なご様子で読書欲はまだ衰えてないようでした。その後今年の3月に入って田中さんのお宅をお訪ねして伺ったお話を中心に、田中さんの人となりについていくつかの項にまとめてご紹介します。



## ○ 略歴など

・明治45年長崎に生まれた。大正14年長崎中学校に入学したが、その当時のことで、英語の教育に大変情熱をお持ちの先生がおられた。この方の感化を受けて熱心に英語の勉強をしたことを覚えている。また、当時を思い出すことの一つに次のようなことがあった。クラウンの辞書に“*If I were you*” (「もし、われ汝なりせば」) ということばが載っていた。自分の考えを相手に理解してもらうためには相手が誰であれトコトン議論するが、時に相手の立場に立って考えて見る必要がある。相手に理があれば、あえて自分の意見を主張することはしない。この考えはその後日本郵船株式会社等へ勤務した時も、一貫して持ち続けた。(このあたりの話振りには明治生まれの人の気骨、あるいは大正デモクラシーのロマンティシズムを感じさせるものがあった。)

・昭和5年、第五高等学校文科甲に入学。しかし、海軍兵学校に入るため、1年で退学した。この折、大部分の本は乗馬部の仲間に譲ったが、一冊だけ図書館に寄贈した。“*Mahan, T.A. : Naval strategy compared and contrasted with the principles and practice of military operations on land*” 1911 (「海軍戦略」) という図書であったが、名著だったようで、そのころの校長から鄭重な礼状をいただいた。これが、後に熊本大学に図書を寄贈するようになったきっかけだった。

・昭和6年海軍兵学校に入学したが、昭和8年病気のため退校。しかし、この時以後病気がしい病気をしたことがない。(伝達式の写真からも見て取れるように、鍛えられた体躯は頑強で背筋が真っ直ぐ立っている姿は、90歳という年齢だけで「老人」と呼ぶことを許さない峻厳なものを感じさせる。)

・昭和9年再び第五高等学校文科甲を受験し入学した。その後、昭和12年九州帝国大学法文学部入学。

・昭和15年日本郵船株式会社入社。函館、マニラに勤務。仕事の合間に読んだ本は、台湾を引き上げるときに日本に持ち帰れないので、現地の人にすべて譲った。昭和36年大洋商船株式会社出向。昭和49年日本タンカー協会専務理事就任。昭和54年退任。

## ○ 読書について

・読書については、小学生の低学年のころ祖父母の家によくでかけ、西洋文学全集、日本文学全集などを讀んだが、文学をよく讀んだのはこのころまでである。専攻の法学は文学と違って実社会に関する全体的・包括的な実学問であり、財政、政治、行政、社会等々とかかわりのある広範な分野を含む学問である。(寄贈していただいた図書のうち、政治・文化・社会状況関係のものが53%、歴史・伝記のもの35%、工学・自然科学6%、その他6%の構成になっている。)

・一冊600ページ前後の洋書をひと月10冊から12冊のペースで讀んでいる。いまでも、讀みたいものを



探すため東京の丸善に出かけている。(とくに読んだものを文章にはおられないが、「共同海損の研究」成山堂書店 昭和55年刊の著書がある。)

○ 教育・教訓など

・五高に山形元治という英語の先生がおられた。ある時授業で "the one" の意味を問われたが、誰も答えられなかった。それは、"only one" という意味である。この時先生から教わったことは、冠詞ひとつといえどもおろそかにしてはならないという勉学に対する厳密さ、厳格さということであった。山形先生の口癖は「あなたはなんのために、五高にきたのですか。勉強しないのならすぐにでも辞めたほうがいいですよ。次に合格するはずの人が待っているから」ということであった。入学当初の最初の授業にこのように言われ、学生のなかにはあまりの緊張のために卒倒する者もいた。この厳しさの教えが後々役に立った。(今の学生にこの厳しさを求めるのは、無理なのか。今昔の感。)

・ Paul Kennedy "Preparing for the twenty-first century" によれば、アメリカの教育は、一部のエリートを育てる教育。日本の教育は全体的レベルアップを目指す教育、ということである。これが戦後日本の復興の基になった。(現在は、このことが少子化傾向など社会状況の変化とともに制度疲労を来しており、教育改革の対象になっているのだが・・・)

・ 大学は程度の高い基礎的学力をつけるところである。卒業してからの、本当のスタートとなる。社会に出てからのさまざまな問題に取り組む力を身につけているかどうか、大切である。

・ 「名刺の魔術」からの解放。仕事を定年で辞めてからが、肩書きではなく本当の中身の勝負ができる時である。

90歳になる今なお読書量は減少することなく、お話の内容と言葉が明確なのには驚くばかりです。田中千束さんの人柄の一端を窺うことはできるかもしれないと思い、訪問記としてご紹介した次第です。(なお、図書を熊本大学に寄贈することとなった動機及びひと月あたりの読書冊数については、東光原 Vol.26 No.3/4でのご報告は正しくなく、本稿のなかで訂正させていただきました。)

(もりまつ むつお 情報管理課長)



紺綬褒章伝達式／学長室にて



五高記念館にて

## 本学教官寄贈図書 (平成14年1月～3月)

★ASPECT熊大コーナーに配架しています★

◆杉浦直人講師 (理学部)  
ハチとアリの自然史：本能の進化学 / 杉浦直人  
[ほか] 編著. -- 札幌：北海道大学図書刊行会，  
2002.3.  
中央館・教官著書コーナー : 486.7/H,11

県)：一の宮町，2001.12. -- (自然と文化阿蘇選  
書 / 一の宮町史編纂委員会編集；3. 一の宮町  
史).  
中央館・教官著書コーナー : 219.4/Sh,93/(3)

◆桑原莞爾教授 (文学部)  
イギリス近代史点景：一つの書評集 / 桑原莞爾  
著. -- 福岡：九州大学出版会，2002.2.  
中央館・教官著書コーナー : 332.33/Ku,95

◆上村直己教授 (文学部)  
明治期ドイツ語学者の研究 / 上村直己著. -- 東京  
：多賀出版，2001.3.  
中央館・教官著書コーナー : 840.1/Ka,37

◆吉村豊雄教授 (文学部)  
藩政下の村と在町：近世の阿蘇 / 吉村豊雄著  
；一の宮町史編纂委員会編集. -- 一の宮町(熊本

(寄贈日時順)

## 最近の図書館の動き (平成14年1月～3月)

●開館時間の延長 (中央館)  
平成14年4月から、平日を1時間延長して開館時  
間を午後10時まで開館しております。どうぞ、ご  
利用ください。

●閲覧座席の増設  
試験期には、臨時に大会議室を開放します。  
(40席)

●環境の整備  
玄関ロビー及びカウンター周辺の照明を増設し、  
ジュウタンも改修しました。

●研究室返却図書の整理  
大教センター改修に伴う研究室返却図書(法・  
文・理)を3月19日中央館書庫・旧館に搬入し配架  
しました。

## 人事異動 (平成14年1月～3月)

### ■異動

(平成14年4月1日付)

九州大学附属図書館情報管理課長  
佐賀医科大学教務部図書課長  
八代工業高等専門学校庶務課図書係長  
理学部総務係事務補佐員  
事務部長  
情報サービス課長  
情報管理課電子情報係長  
情報管理課雑誌情報係  
情報サービス課相互利用サービス係  
情報サービス課医学情報サービス係  
情報管理課総務係事務補佐員  
情報管理課図書情報係事務補佐員  
情報サービス課資料サービス係事務補佐員  
情報サービス課医学情報サービス係事務補佐員

濱崎 修一 (情報サービス課長)  
甲斐 重武 (情報管理課電子情報係長)  
川内野 祐子 (情報管理課雑誌情報係)  
吉村 貴子 (情報サービス課相互利用サービス係事務補佐員)  
高塩 勝也 (九州大学附属図書館情報管理課長)  
加藤 信哉 (名古屋大学附属図書館情報管理課課長補佐)  
高木 貞治 (八代工業高等専門学校庶務課図書係長)  
濱崎 千雅 (情報サービス課資料サービス係)  
中川 智之 (情報サービス課医学情報サービス係)  
宮崎 紀子 (理学部総務係)  
水本 美智子 (情報管理課図書情報係事務補佐員)  
井 眞祐美 (情報サービス課医学情報サービス係事務補佐員)  
園田 雅子 (情報管理課図書情報係事務補佐員)  
米田 幸子 (情報管理課総務係事務補佐員)

### ■退職

(平成14年3月31日付)

事務部長 山下 谷治



## 平成14年度附属図書館運営委員

（平成14年4月1日現在）

工学部	館長	平山 忠一	薬学部	教授	原野 一誠
文学部	助教授	市川 雅己	工学部	教授	内村 圭一
教育学部	助教授	堀畑 正臣	大学院自然科学研究科	助教授	伊藤 重剛
法学部	教授	松原 弘信	医学部附属病院	助教授	影下 登志郎
理学部	教授	西野 宏	大学教育研究センター	助教授	池田 志郎
医学部	教授	小川 尚	医療技術短期大学部	教授	安倍 紀一郎

## 委員会報告（平成14年1月～3月）

## 附属図書館運営委員会

## ■平成13年度第4回附属図書館運営委員会（1月23日）

[協議事項]

- (1)平成14年度概算要求について
- (2)利用規則の改正
- (3)未返却図書の督促について
- (4)電子的サービス推進専門委員会報告について
- (5)その他

[報告事項]

- (1)拡大第三常置委員会の審議状況について
- (2)重点配分経費による学生図書、電子ジャーナル及びデータベースの整備状況について
- (3)図書館サービス品質調査の実施について
- (4)その他
  - 1.大学教育研究センター改修工事に伴う図書の移動作業について
  - 2.オンラインレファレンスサービスに関する利用者モニターの実施について

## ■平成13年度第5回附属図書館運営委員会（2月27日）

[協議事項]

- (1)ギガビット対応電子図書館システム経費について
- (2)未返却図書の督促について
- (3)電子的サービス推進専門委員会報告について
- (4)その他

[報告事項]

- (1)拡大第三常置委員会の審議状況について
- (2)中央館入退館システムの導入について
- (3)九州地区行政評価局実態把握について
- (4)平成14年度熊本大学学術資料調査研究推進室室員（案）について
- (5)その他

## 附属図書館専門委員会

## ■平成13年度第4回電子的サービス推進専門委員会（1月18日）

[協議事項]

- (1)前回議事録の確認
- (2)事業の進捗状況
- (3)分野別重複調整
- (4)新しい電子ジャーナル・データベース及び利用統計・アンケート
- (5)報告書及び平成14年度の方針
- (6)その他

## 日誌（平成14年1月～3月）

1.16-18	国立大学附属図書館事務部長会議	1.23	平成13年度第4回附属図書館運営委員会
1.18	平成13年度第4回電子的サービス推進専門委員会	2.27	平成13年度第5回附属図書館運営委員会
1.19-20	平成13年度図書館等情報化支援会議（国立情報学研究所）	3.19	中央館・旧館への図書、雑誌移動作業
1.22-23	EBMリサーチライブラリアン／ワークショップ		



# 入退館システムを導入

新年度から中央館に入退館システムを導入し、4月8日（月）から運用を開始しました。

このシステムは、入館システムと退館システムからなっていますが、入館システムは、今回新たに導入したもので、入館の際、入館ゲートのリーダーにIDカード（学生は学生証、教職員は身分証明書）を読み取らせて入館するシステムです。運用を開始して、約1ヶ月が過ぎましたが、IDカードの読み取らせにも少しずつ慣れて来ていただいているようです。この入館システムによって、学部別、身分別（学生・教職員・一般市民）、時間別、曜日別にさまざまな統計を取れるようになり、利用者の動向が把握できるようになりました。4月の統計でみると、曜日別では金曜日の利用が多く、学部別利用では多い方から工学部、法学部、教育学部の順でした。時間帯では、午後1時から3時台の利用が多いようです。また、利用者の内訳から一般市民の方が思っていたより多く図書館を利用しているという事などがわかりました。これら、多様な統計は、今後、利用者サービスに反映させていきたいと思っています。また、セキュリティ面での強化もシステム導入の利点です。

導入前と比べ、入館の手間は少しかかるようになりましたがご協力よろしくお願いいたします。



入館ゲート



カード読込口



退館ゲート

編集後記： 附属図書館報の誌名である『東光原』の由来の説明を読んで卒業した中学校の応援歌を思い出しました。その応援歌の一番の歌詞は次のとおりです。「時乾坤に巡来て 雄物川原の深緑 西山原頭 我立てば 若き血潮のたぎり来て とつこの敵を破らずば 誰か覇権を口にす」 「原頭」の元の意味は野原で転じて運動場ないしは野球場を示していたようです。『東光原』はさしずめ朝日が良く当たる運動場ということになるでしょう。

『東光原』の意味にかけている訳ではありませんが、附属図書館報が利用者の皆様に図書館の姿を照らし出し、図書館の進路を示す力強い光であると共に図書館の様々な活動をお知らせする野原を吹き抜けるさわやかな一陣の風でありたいと願っています。皆様の附属図書館に対するご意見や要望をお待ちしています。 (か)

熊本大学附属図書館報「東光原」（とうこうげん）\*  
第32号(Vol.11 No.2)

平成14年(2002年)4月 第32号 (2002.4)発行

発行所 熊本大学附属図書館  
〒860-8555 熊本市黒髪2-40-1  
TEL:096 (342) 2273 FAX:096 (342) 2210  
<http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/tokogen/>

編集 加藤信哉, 梅尾勝征, 安陪光恭,  
北野典子, 中尾康朗, 森下和博

※ 現在の中央館の敷地一帯が、旧制第五高等学校時代東光原と称する運動場であったことに由来する。